

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立加賀高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)
1 基本的な生活習慣の確立 およびインターネット利用における情報モラルやスマートフォン等使用に係るルール・モラルの啓発に努め、社会に出て通用する規範意識を育む。(登校指導・挨拶運動の推進、服装容儀の指導、家庭との連携強化)	① 段階的な遅刻防止指導を取り入れ、遅刻者を減らす。特に遅刻常習者の人数を減らすことに重点を置いて指導する。	無遅刻日数が100日を超えるクラスが A 全クラスで達成できた B 4つ以上のクラスで達成できた C 3つ以上のクラスで達成できた D 3クラス未満の達成であった	C (3クラス達成)	昨年度より1クラス減少し、3クラスが無遅刻日数100日を達成した。家庭との連携・協力が不可欠だと考え取り組んできたが、それでも改善が難しい生徒も多い。時間を守ることの意義をしっかりと理解させたり、個別の支援による生活習慣の改善等、個々に合わせたより効果的な指導を考え、これからも実践していく。
	② 登校時と下校時及び授業の際には大きな声で主体的に挨拶できるようにする。また、生徒会を中心とした有志の生徒を募り、生徒による挨拶運動を積極的に展開していく。	先生や外部の方に対し、先手の挨拶ができる実感している生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C (70%)	日々の学校生活の中で朝の挨拶や授業開始時の挨拶は十分とはいえない。挨拶の大切さについて生徒自ら考え、一人でも多くの生徒がしっかりと先手の挨拶ができるような取り組みを進めていきたい。
	③ 生徒会主催のいじめ撲滅キャンペーンを行い、放送等によるいじめ防止啓発活動を行うなど、いじめを見逃さない学校づくりのための対応や体制づくりの向上を図る。	いじめを見逃さない学校づくりのために適切な取組がされていると実感できる生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C (74%)	いじめ防止について相手や周りが不快になる言動や不適切な言動をしないように継続的に訴え続けた。いじめの訴えもしやすい体制を整えた。また、日々の観察やアンケートを年間5回実施することを通しての早期発見、早期対応により、早期解決に努めた。ただいじめは完全になくなったとは言えないので、安全安心な学校づくりのために具体的な取り組みを考え、実行していきたい。
	④ スマートフォン等の使用に係る問題点や危険性等について、朝学習や昼休みの放送及び全校・学年集会等でモラルやマナーを理解させるとともに、家庭との連携を深めた対策を実施するため保護者にもスマートフォン等使用に関する注意事項等の説明会を実施する。	スマートフォン等の使用に係る問題点や危険性について理解が深まり、使用に関するモラルやマナーを守っている生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	A (97%)	生徒はスマートフォン等の使用に関するモラルやマナーを守っていると認識しているようである。しかし、まだその理解については不十分であり、トラブル発生も多い。スマートフォン等のトラブルに巻き込まれないように、機を逃さずに、時には外部の関係機関と協力しながら指導を続けていく。
学校関係者評価委員会の評価		遅刻者を減らす取組に苦勞がみられるが、クラス全体より個別指導として評価基準を見直すとよい。いじめを見逃さない取組については、生徒が実感できるように粘り強く取り組んでほしい。		
学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策		遅刻防止の指導については、個別指導での取組や指標の見直しを行う。また、いじめ防止については、全体への予防的な指導と個別の相談や対応の二面で、いじめを見逃さない取組が実感できるよう努める。		
2 あらゆる教育活動を通して日本語4技能(読む・書く・話す・聴く)の育成を図り、授業力向上とキャリア教育の充実に努め、GIGAスクール構想のもと主体的・対話的で深い学びを推進し、専門的な技能の習得と個に応じた進路実現を目指す。(研究授業の充実、「総合的な探究の時間」の深化、学び直しによる基礎学力の定着、有用な資格の取得、個人面談・個別指導の充実、個別最適な学びのための1人1台端末の活用)	① 授業において、ねらいや到達目標の明示、発問の工夫、教員の指導スキルの向上に取り組む、主体的・対話的で深い学びにつながる授業を展開する。	授業を通して学力が身に付いたと実感できている生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	A (94%)	生徒は概ね学力が身に付いたと実感できている様子である。特に1、2年生の達成度が高いため、その理由を分析しつつ、教員間で共有しスキルと生徒の授業満足度の向上を目指す。
	② GIGAスクール構想のもとICT環境の整備と指導スキルの向上に努め、生徒の1人1台端末を活用する場面を取り入れた授業に努める。	授業でICT機器が効果的に使われていると実感できている生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	A (90%)	今年度前期評価(84%)より6ポイント増加している。引き続き、個別最適な学びの手段として、1人1台端末を活用するという教員への意識付けと、生徒の学びが深まったと実感する有用な使用方法を研究していく必要がある。
	③ 習熟度別や少人数制の学習指導等を通して、基礎学力の定着・向上を図るとともに、生徒全般の成績の向上につなげる。	外部試験において、成績上昇者の割合が A 60%以上である B 55%以上である C 50%以上である D 50%未満である	D (47%)	昨年度に引き続き、偏差値が向上した生徒は半分以下である。校内の考査と、外部テストで教員の指導・生徒の取り組みに大きな差がある。次年度は基礎学力向上の大切さを伝えることを課題とし、指標もより適切なものに変更する。
	④ 日本語4技能(読む・書く・話す・聴く)の育成を図るため、生徒が自分の考えを書いたり、話したりする場面を取り入れた授業に努める。	授業で自分の考えを書いたり、話したりする場面があるという生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	B (89%)	生徒は概ね授業で自分の考えを書いたり話したりする場面があると感じている様子である。3年生が中間と比べて6ポイント減少しているため、3年生の後期授業について、生徒が表現できる場面の設定を教員に呼びかけていく。
	⑤ 「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」をとおして、キャリア教育の充実に努める。	「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」の授業は自分の将来を考える上で役立つという生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	B (83%)	1年生が例年と比べてかなり低い数字となり、その他の学年も下回るようになった。より良い刺激を与え、各行事の意義が感じ取れるよう、授業内容の見直しを行う。
	⑥ 一社会人として「生涯にわたって学習する」態度の基礎を育むため、資格取得への挑戦を継続させる。	1年間に1つ以上の資格を取得した生徒の割合が A 60%以上である B 55%以上である C 50%以上である D 50%未満である	D (39%)	数字の低下が続いている。資格取得への意欲が年々低くなっているが、呼びかけを一層強化し、進路実現につながるその意義を生徒たちに伝える。
学校関係者評価委員会の評価		少人数授業の効果が表れている。個に応じた指導ができることが本校の強みである。少人数を活かした学校づくりを進めるとよい。また、資格取得に向けた補習等の課外活動を活性化するとよい。		
学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策		少人数授業で生徒との信頼関係を構築し、学習が苦手な生徒に学びをサポートする仕組みの改善を進める。また、資格取得については、アンケート集計後の検定合格も加えた指標とする見直しを行う。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	
3 地域貢献活動を通して、生徒の豊かな人間性や社会性を醸成し、自己肯定感を高める。(ボランティア活動と地域交流事業の推進、部活動と生徒会活動の活性化)	① 様々な背景をもつ生徒に対する理解に努め、支援できる能力の向上を目指す。	先生は自分のことを理解しようとしてくれているという生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	A (95%)	担任を中心に関係の先生方が生徒との面談を丁寧に行っていることで生徒と教員の関係は良好だと考えられる。スクールカウンセラーや外部の専門機関との連携や校内での情報共有をよりいっそう行い、学校内の支援体制を整える必要がある。	
	② 地域に根ざした学校として、学校全体が一体となり、地域の清掃等のボランティア活動に進んで取り組むことで、生徒の自己有用感や自己肯定感の醸成につなげる。	年間を通してキャリアアップ部やその他のボランティア活動に参加したことのある生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C (74%)	全校生とが加盟しているキャリアアップ部(KCB)も6年目となり、生徒にもボランティア活動に参加することが日常のこととして定着してきている。今後は、その活動を全生徒に広めていくことや、地域にPRしていくことが課題である。2学期以降は参加率がやや低下しているため、特に2、3年生の生徒が参加してもらえるように工夫していく必要がある。KCB執行部を中心に活動内容も検討していく。	
	③ 部活動を通して生徒の活力を引き出し、自信を持たせることによって学校の活性化につなげる。	部活動に取り組む生徒の割合が A 70%以上である B 65%以上である C 60%以上である D 60%未満である	B (69%)	4月当初の部活動加入率は毎年高いが、1年生を中心に退部や参加しなくなるなど少しずつ低下する傾向にある。部を辞めた生徒でも他の部へ入部しやすくする事や参加できていない生徒が部に参加しやすい環境を整えていくと共に、部を継続している生徒が今後も意欲的に活動できるよう検討していきたい。	
学校関係者評価委員会の評価		KCB活動や和太鼓部、吹奏楽部が地域の行事によく参加し、地域貢献で頑張っている。今後も地域交流活動を継続し、外部人材を活用するなどして、様々な経験を重ねて地域に貢献できる人材を育ててほしい。			
学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策		KCB活動が加賀市善行奨励賞を受賞し、生徒の自己肯定感を高めている。今後も取組内容の改善と意識の高揚を図っていく。また、少人数の部活動でも、他校との合同チームや合同練習を進めることで活性化を図る。			
4 教育活動の成果を積極的に発信し、家庭や地域から信頼される学校づくりを推進する。(ホームページとメール配信の効果的活用、小中学校との連携強化、積極的な学校公開)	① 教育活動に関して保護者や地域住民及び中学校の要望等に応えるため、PTAや同窓会及び地域に対して本校ホームページや学校メールを効果的に活用してタイムリーな情報を提供し、開かれた学校づくりを推進する。また、地域や中学校には「加賀高だより」を配布する。	本校のホームページやメール配信が学校の教育活動を知る上で役立っていると思っている保護者の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	B (88%)	一斉メールについては、生徒が保護者のどちらかが、ほとんど登録した。内容やタイミングを精選し、保護者にとって効果的な活用ができるものにしていく。ホームページについては、昨年度の閲覧数と比較すると全体的に増えており、閲覧数の平均は4万を超えている。部活動や生徒の活躍など、最新の情報を載せることで、加賀高校の今を発信していきたい。同時に、閲覧数増加に向けての仕掛けや工夫も継続していく必要がある。「加賀高だより」についても生徒が中心となって編集できることを目指していく。	
	学校関係者評価委員会の評価		11月の学校公開(文化講座)は、もっと地域の方々や中学生などに呼び掛けて、加賀高校のPRにつなげるとよい。		
	学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策		学校公開については、地域や中学校へPRするとともに、保護者にもPTA活動を通して学校に来てもらえるように、加賀高だよりの発行やホームページの発信で、学校や生徒の様子をわかりやすく伝えていく。		
5 教職員のワークライフバランスの意識をさらに高めるとともに、働き方改革をより一層推進し、生徒と向き合う時間を確保する。(時間外勤務の正確な実態把握と業務改善)	① 教員一人ひとりの時間外勤務について実態を把握するとともに早めの帰宅がしやすい雰囲気構築する。	時間外勤務月60時間以上の教員の割合が 年間 A 5%未満である B 5%以上10%未満である C 10%以上15%未満である D 15%以上である	A (4%)	4月は年度初めの業務が多く、特定の課の教員の時間外勤務が月60時間以上となった。また、休日に部活動指導を行っている教員複数名が月60時間以上となった。後期の学校評価アンケート(教職員)では「多忙化改善に向けて工夫したり、業務改善のアイデアを提案したりするなど、働き方改革を実行している」の肯定的な回答が76%(R5 95%)であり、意識を高めて改善点を見出し、業務の見直しと平準化を図る。	
	学校関係者評価委員会の評価		保護者の協力や地域人材の活用を進めて、教職員の多忙化改善につなげていくとよい。		
	学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策		保護者・地域の理解と支援をいただきながら、ICTも活用し、業務改善に努める。		